

「五葉山」からの贈り物

(5)

「それぞれの生きるかたち」『五葉山の魅力』のない私に登頂できるわら紹介されて、ぐっと引き込まれ一気に読んだ。リレーエッセイは、陸前高田市に大館市から毎週通い教育支援等を続いている高橋秀一さんから紹介されて、ぐっと引き込まれ一気に読んだ。ボランティアバス(ボラバス)の車窓から探してみたものの、みつけられなかつた。しかし先日、「ここらの情景思い出写真館」(株東海新報社)の中に、津波に襲われる前の太船渡市街から望む五葉山を発見した。山に抱かれている街の情景に、エッセイの言葉が輝きを増して魅つた。

山と言えば、以前エベレストを目指したことがある。ただし夏の富士山を自信する私は次の予定

でも8回目を超えたことが気になり、搭乗をあきらめ空港を後にした。けもなく、飛行機の窓から山を眺めるという方法を選択した。

ところが、搭乗口の傍

りでいつまで待ってもゲ

ートが開かない。定刻は

どうに過ぎていてるのに何

の案内もなく、地上係員の姿すら見当たらない。

時計を見れば14時14分

意味もなくうろうろと歩

き回つた。他にも数人が

落ち着きなく動き回つて

いたのだが、よく見ると

みな日本人であつた。

そこにいた外国人た

ちは、穏やかに本を読ん

だり談笑したりして過ご

していた。彼らは雄大な

自然の中でゆったりと流

れる時間を至極当然に受

け入れているように見え

た。結局、正統派日本人

地域に暮らす皆さんの多

くは、「あの日」以来二つ

の山を抱えている。失われてしまった「形の再建・復興」という山と、傷ついてしまった「心の修復・回復」という山。そ

のどちらの山も、一人一人が暮らしの中で乗り越えるシエルバは、神々の座どまれる山で生きていく。彼らに限らず地元の山に抱かれて住まつた人

が発災直後に変わらぬ優しさで応じてくれる。厳しい現実の中にある。みんな今でも被災地を思

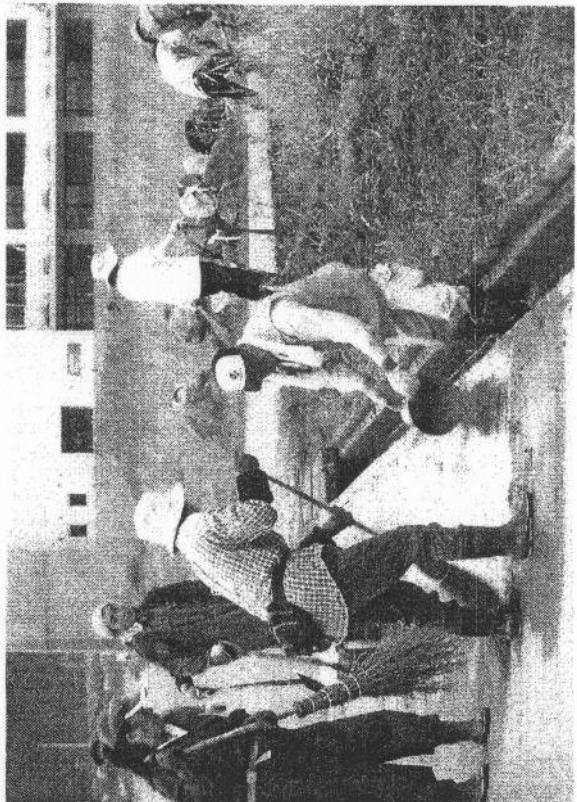
願わくは一日でも早く復興回復してほしい。け

けているのだ。ボラバス

ちから、私たちは学び続けたい。長く険しい道のりをくずつと応援し続けるを模索しつつ、誰でもかけたい。輝く街並みが望める五葉山に登る日を夢見て。気軽に参加できる日帰りのボラバスツアー等を企画している。

【執筆者プロフィール】

秋田県大館市在住、47歳。大館ボラバスプロジェクト責任者。大館市ボラバス参加者たち



「それぞれの生きるかたち」

／復興への道のり／

秋田県大館市 小林 佳久

ちは皆、その山の恵みを受け、その山と共に暮らしている。安易に飛行機の窓から山を眺めようとしたり写真だけで山を知ったり写真だけでは山を知らないのかわり方とは全く違うのである。

五葉山に抱かれて気仙地域に暮らす皆さんの多くは、「あの日」以来二つともなく愁うる顔を見た。同じ山に抱かれて絆をせながらやさしく全てを包み込む大自然の中に生か助け合いながら共に抱えていてることを思えた山を乗り越えていく。立ち止まつたり思う「それぞれの生きるかた